

## 全船協会長経歴紹介

今年6月全船協の会長に就任した岩田です。会報には就任にあたっての抱負と全船協の現状をかいつまんで書きましたが、会長の経歴を知りたいとの意見が寄せられましたので卒業から今日までたどってきた経緯をまとめ披露します。

### 入学経緯

生まれは群馬県前橋市、海なし県と言われますが当然、周囲に船員などいませんでした。たまたま親友の兄が東京水産大学の学生であったことから、その友に鳥羽商船の受験を誘われ、物見遊山気分で親友3名で東京商船大学の試験場へ、1次試験で1名脱落、2次試験でもう一人が脱落でたった一人残されました。一人での進学は気が進まず判断を逡巡していたところ、周囲からの強い勧めで入学することになった。

### 卒業後の経歴

昭和40年専攻科卒業、日本郵船入社、当時は大手船社は何人でも欲しいという時代であり、友達同士で就職先を決める無茶な方法で郵船のお世話になった。

三等機関士を約8年、ボロ船から新造船を含め7隻に乗船。

昭和48年二等機関士の拝命を機会に8年間の船員生活を振り返り知識のブラッシュアップを兼ねて海技大学校本科機関科に入学を会社に願い出て許しを得ることができた。

この2年間は専門教科のみならず、郵船以外の船員との交流などを通じ広く社会を見る目を養うのに役立った。

昭和50年海大卒業で郵船復帰、原油・鉱石輸送兼用船を経験後、艀装員として津造船所での新造タンカーの受け取り業務につく。

昭和52年新造タンカーの処女航海を無事済ませ、シンガポールで下船し有給休暇。

同年秋、郵船の関連会社横浜電工（株）（現ボルテック）に出向。郵船の社船及び関連会社の船舶修理（電気部門）を主な業務としていたが、修理サービスを提供してお金を頂くことの難しさと厳しさが骨身にしみる体験であった。この体験は自分の仕事に対する見方を一変させることとなった。

昭和56年、郵船復帰後、欧州航路コンテナ船、電力会社向けの石炭専用船、LNGガス専用船、少数定員近代化船の実証・実験コンテナ船、タンカーの主機換装などなどに一機士として乗船、郵船として新しい試みの船で貴重な体験をした。

昭和61年、横浜支店保船技術課勤務。郵船船隊の保船業務に当たる。船舶の沖修理手配や船用品手配並びに入渠船の修繕工事管理いわゆる船舶管理業務を体験する。

3名で担当してきた甲板・機関・無線の入渠船工事管理を一人で行う合理化などにも取り組んだことなど懐かしく思い出す。

### 昭和63年機関長拝命

機関長として韓国人との混乗コンテナ船、VLCCタンカー、探検客船に乗船。

客船クルーとして社内研修所での英会話研修やら米国でのホームステイなど新たな体験を

積むことになった。当初、北欧人との客船文化の相違から些細なことで日本人の乗り組みと北欧人との間でトラブルがしばしば発生したが、日本人の会話力のアップによりトラブルも自然と減少してきた。

担当した客船は小型の探検客船（5千トン程度）で北極・南極・アマゾンクルーズを主な業務としており船底接触事故はしばしば体験することになる。海図もない海域は大きな地図帳を拡大コピーして走るつわものの北欧の船長もいた。日本人船長としては考えられない大胆さでもあり周囲の日本人船員は肝を冷やすことになる。

南極の夏季に3年通い、北極も1航海、体験する事ができた。この船のおかげで商船では行けない地球上の隅々の海を航海し、冷や汗あり感動ありで思い出深い船であった。

平成8年、二機士時代に世話になった関連会社に出向、沖修理会社の経営に参画する。

平成10年郵船依願退職 そのまま出向先の関連会社の経営スタッフとして入社する。

平成16年関連会社依願退職。

平成20年全日本船舶機関士協会が内航船の省エネルギー診断業務を開始したため診断員として業務に参画。

平成23年全日本船舶機関士協会理事就任

平成24年全日本船舶職員協会理事副会長就任

平成25年全日本船舶機関士協会理事辞任

平成26年全日本船舶職員協会会長就任

現在に至る。

以上